

市民社会の熟成に向けた社会的基礎土壤づくり～足元からの積み重ね

Building Social Foundation for Development of Mature Civil Society

— Starting with small incremental Steps

富樫 豊
Togashi Yutaka

NPO 地域における知識の結い、代表、工博
Colleague of knowledge、Chairman, Dr.Eng

要約

諸問題解決に向けた問題毎行動や連携行動への強力な支援には、社会全体の見識良識を構成する基礎力(社会的基礎土壤と称す)の醸成が必要として、これが問題対処の「バックランド」となる市民側の活力を増強すると考えた。ここでは、社会的基礎土壤を(市民や市民社会の)足元からの運動で構成されるとして、その根幹をなすコミュニケーションのコミュニケーションと街づくりに着目し、基礎土壤の骨格を明らかにした。

社会的基礎土壤 コミュニケーションのコミュニケーション
Social foundation Community of Communication Citizen centric Town Planing

【0】. 概要

稿の構成を記す。

1. 目的

今の社会には成熟に向けて充実しているかのようなムードが根底にあり、市民は幸福をめざして社会生活を楽しんでいるかの様がまことしやかとなっているが、実際はそのようなことはなく、市民は生活苦や各種の災害にさらされており、市民の憤懣やるかたなさは相当なものといえよう。

こうした諸問題に対処して市民がより良き生活が営めるように、社会をどうつくっていくかが当然ながら最大課題となっている。

では、我らはどう対処するのか(すべきか)。確かに問題は(今後を含め)山済みであるだけに、問題の特質を含めて方法としては二つを考えたい。ひとつは、各種問題ごとに對処することであり、今一つは各種問題に對処できる「バックランド」を充実させることである。もともと各種問題の根っこは共通であり、社会に巣くっているだけに、諸問題の個別対応の場合にも関連する問題との連携があり、その意味では「バックランド」への対応は諸問題に對処社会全体ともいえ、社会全体の総力対応にもつながる。

また、ここでいう「バックランド」は社会における教養、意識、知性・感性などで構成される個人(個人)からの多様性をも含めた総体と考え、もともとはリバーラゲツを超えた人間環境の意思の表体・総体としている。

本稿では、上記の考え方で、世の中の基礎度胸を醸成していくことが目的である。目的の遂行にあたっては、まずは、本稿の考え方の詳細として社会的基礎土壤の全貌とその在り方を扱い、次いで基礎的土壤づくりはコミュニケーションのコミュニケーションと街づくりにありとして論を進める。以下に本

2. 本稿の構成:

本稿を3篇に分けて詳述とした。各編は以下の通り。

(1)社会的基礎土壤づくり

- ・社会の諸問題とその捉え方；個人、市民側
- ・社会の諸事情と社会健全化；市民と専門家、感性と知性
- ・健全化に向けて；推進側の論理、社会ムード
- ・市民側からの社会の健全化；暮らし、セス・気づき・学び
- ・市民力向上に向け；市民力、土壤から行動へ、活動
- ・市民系の思考総体；実践先行における思考から学へ
- ・足元からの市民運動；運動、方向、形態、市民運動

(2)コミュニケーションのコミュニケーション

- ・コミュニケーションのコミュニケーション；人間環境、他種類、他
- ・自由闊達なコミュニケーション；朝活、カフェ、他
- ・実際に運営の場や会；運営の様相、連携
- ・社会的基礎体力づくりへ
- ・学術(建築系)世界の市民感覚のコミュニケーション；学生・実務者、他

(3)街づくり

- ・社会的基礎土壤づくり；基礎土壤づくり
- ・街づくり一般；地域活性化、街づくり構成要素
- ・街づくりと市民の意見
- ・街づくりの遂行に際し
- ・富山における街づくりと環境保全；人間模様、他
- ・富山での取り組み事例；滑川宿街並み、山間一軒村

3. まとめ；本稿のまとめを本稿先頭に配置(速読派用)

先に各編のまとめを見られてからがいい
社会における諸問題解決に向けては、問題毎に對処に方
法とその「バックランド」を充実させて事に当たる方法とがある

として、ここでは後者の方法についてスポットを当てて、そのための理論構成を行うとともに、その遂行にあたり社会や個人の足元からの生活の営みを充実させることにあるとして、コミュニケーションのコミュニエイと街づくりにおける実践に論究した。議論結果は各編の末に詳しく述べたので、ここではそれらをさらにまとめる形で列挙する。

<1> 社会的基礎土壤について

諸問題の解決に向けてた問題対処行動や問題別広範行動について強力に支援する「バックグランド」として市民側の活力(基礎体力)体系を明らかにした。そこには;

社会づくりにおいて組織論理や社会システム論理に対峙して市民論理が位置付けられる。市民論理の根幹は街づくりであり、街づくりを基に社会づくりへとつくりあげ。

暮らしは社会活動の基礎実践を自然体として、感性や知性の基礎土壤へと繋がる。暮らしの延長として街・地域・都市・社会をつないで市民感覚を市民主導に組み込み可。そして市民側からの思考・行動が市民流に体系化。

市民力向上には、暮らしの中でのコミュニケーションのコミュニティが関わり、市民土壤づくりの場となる。

<2> コミュニケーションのコミュニティ

自由闊達なコミュニケーションが可能となるコミュニティづくりを基本として、社会的基礎土壤の形成につながり、市民社会を揺らがせかねない思考停止傾向の改善をもとに市民社会活力醸成が期待できる。そこには;

コミュニケーションの場とチャンスが日常化し広がり、コミュニケーションにおける対等感と各自の作り上げ感がより強まり、コミュニケーションへの期待と良さの実感が基礎土壤の構成に繋がっている。これが、各種のコミュニケーションと積層して大きなコミュニケーションをつくっている。街中のコミュニケーションが地域やさらに上位に位置するコミュニケーションに向け積み上がっていく。

<3> 街づくり

市民活動としての街づくりをコミュニケーションのコミュニティとのリンクを図り、富山での実践をもとに街づくりの基礎土壤化を目指す方向を探った。そこでは;

街づくりには基礎土壤を形成する事象を抽出した。

- ・地域一帯；家族的コミュニケーション、街衆気風

　　背後；お祭り、街づくり地域協定、町内会協定

- ・市民の拠り所；風情ある建造物

- ・自然との交り；中山間にわか居住、行動規制無し

・訪問者役割；環境と一体化、訪問者が持帰り役立てなお街づくりには；地域毎のアゲンシーが基本、地域には都会論理も田舎論理も対等であり、「個からの始まり」や「足元から」の考えが社会づくりそのものといえる。

4. 謝辞：

本論の展開に際しては、任意団体の「災害と社会研究談話会」並びに「人新世生存実践研究会」の皆様方と数多くの

議論をいただきました。また、コミュニケーションのコミュニティでは平場の当該場の皆さんには議論・語り合い・対話でお世話になり、また街・村づくりでは宿場町や中山間村での保存・活用の各位には取材にてお世話になった。ここに、記して関係各位に謝意を表する。

【1】社会的基礎土壤づくり

1. はじめに

1.1 目的 近年、地球規模では気候変動による災害、広域規模では都市環境改変、ゴミ放置等の環境危機が深刻化していることを受け、著者は諸問題が社会の歪の噴出そのものと位置づけ、問題解決には社会健全化を目指すべきとして環境保全や街づくり等の市民活動の盛り上げることを考えた。

本稿では、上記考えの具体化として、市民と専門家の役割、市民・社会の理念理想、足元思考(市民生活の営みからの社会展望)等に基づいて、諸問題への対処の前段階として社会システムや市民(市民社会)の在り方を社会土壤づくり(社会的基礎体力向上)として論を展開する。具体的には、市民行動・活動に向けた市民の思考・行動・感性に着目する社会的基礎体力づくりを目指して、「社会的基礎体力及びその周辺」のあるべき姿を展望することにする。

1.2 問題の着目 論点は諸問題への市民のコトをどう図るかである。このため、まずは諸問題展望として市民視点の明確化を図り、危機対応の前段階における準備を市民視点で以下のように構成する。・市民の感性からの思考・行動、

・問題構成の明確化＝→社会健全化、・諸問題に共通する根源(根っこ)から市民の潜在的テッシャル向上を図り市民運動へと展開。なお文中表現について「個々」とは個人や個別のこと、社会的基礎体力を単に基盤体力や基礎土壤として混用して記す。

2.. 社会の諸問題とその捉え方

2.1 個人側からの社会対応 現行社会における不都合には過度の分業・専門分化、事象の関連性分断化等があり、人間の営みでいえば人間関係希薄化、均質化、同調圧力等があり、環境面でいえば、生活居住環境質低下、自然環境破壊、歴史・歴史遺産軽視(建造物含)等がある。

2.2 市民側の基礎体力・基礎土壤 (1) 日常における行動；市民にとって生産行動を含めた社会行動には営みという生業、家事、自己研鑽、等があり、これらに加え、個人やシステムにおける内面的な様相として、人間行動の規範や基礎体力づくりの思考・行動がある。

(2) 社会の諸問題への市民の受け止め方；・諸問題への関わりにはいくつかの場合がある。諸問題により直接被害を受ける、被害者支援並びに不条理解消を目指す積極的

推進者、諸問題には傍観や観察的な出会い。

・市民活動では、観察・傍観の市民をより多くのオルがを目指されている。一方、市民側では、問題の関心が低いようにみえるが、そうではなく、問題に関する思考・行動が沸き上がってこないだけのことである。ではどうする。

これまで、社会のあり方、専門家との協働、市民レベル向上、といった個人を取り巻く環境の充実化が図られており、専門体系をバックにする専門家との連携によって市民には気づきや学びの積み重ねが期待されている。

(3)基礎体力の向上； 土壌はどう耕され充実していくのか。これには、「社会は変だぞ」、「街の先行きがおかしいぞ」といった異変の感覚もあれば、「これはいい、あれはこうである、素晴らしい」という感覚もある。これらは共に市民感覚の研ぎ澄まされた様相であり、市民の基礎体力そのものとなって日常生活の営みとして感覚感性を市民自らが磨いている。

(4)基礎体力(基礎土壤)の骨子； 概念規定のため再述。

・社会健全化；市民視点の確保や市民の基礎体力の充実により、社会の不条理に対応できるようになること(思考プロセスが大事)。

・基礎土壤；社会を育む(支える)基盤。自然・社会・人間環境

・基礎体力；土壤に備わる活力。自己や社会そして環境の状態をしっかりと感覚的に認識できる思考・行動の総体。

・機能；社会や環境に向けての基礎土壤が醸成される。市民運動においては、基礎体力が諸問題解決に向かって沸き上がるパワーが運動の前段階に發揮される。

・土壤耕し；社会と市民の間での相互作用には、社会の諸事象・諸問題からの気づき・学び、人間側からの諸問題への思考・行動といったものがある。相互作用が基礎土壤の耕しとなる。

・基礎体力の構成；歪み解消に向けては日頃からじっくりと足元から、社会を念頭に思考・行動すること。これが基礎体力の構成。

(5)基礎体力の発揮；発揮先は何といつても街づくりであり、その先は社会である。街づくりでは、暮らしがコミュニケーションと一体となって、そこに情熱が集積され、市民社会が身近な存在としてつくられていく。

3. 社会の諸事情と社会健全化に向か

3.1 市民と専門家、市民と専門家の考え方や行動；専門家には、専門行為に際して事業目的や組織論理が背景にあるために、理性や知性に基づいているものの思考や行動には限界がある。これに対し市民においては、社会の底流を成す社会意識(常識や慣習等)のもとであっても、思考や行動には自身の感性や感情を基本にしており、これをもとに次の段階として理性的な思考や行動に繋がっていく。

一方、社会においては、市民と専門家の二者は相対立

する THERE があり、社会運営構成則には組織の論理をもとにした専門論理が主体となるだけに、市民の論理がしばしば霞みがちだが、組織論理が強く立ちはだからない次元であれば、専門家の市民へのパートナーブリや市民への寄り添いが見られる。

3.2 感性と知性 (1)市民と専門家の素養；市民にとっては、感性はより広がった対象について深みを増し、理詰めよりも感性による納得が先行する。専門家では、理論的に一層深い思考があるものの、組織の論理からの思考行動が基本である。

(2)市民の知性・感性の土壤；感性が何事にも先行しかつ認識も感性的であるので、知性についても感性が先行となる。

・各種知識には、細く緩やかな繋がりをもって深まりよりも広がりが特徴。網羅・包括ではなく、統合・総合でもなく。

・組織の論理に縛られないことも必要。例えば子ども問題に着目すると親子遊びでは周辺には組織論理が入り込まず。

3.3 感性からの行動 行動の源には感性からの衝動や情熱にありとして、これが欲望、意欲、情熱、理念理想、打算、ルツ、他となって現れ、行動が思慮や欲望を伴って感性と連動。

・商業ムードにのせられた行動；ムードが欲望の感性に働きかけ、即行動となることが多い。これを感性の鈍化と捉える。

・安定志向の行動；生活の安定・豊かさ・充実を求めるいわゆる安定志向には、新たな挑戦という行動はとりにくい。そこには感性の安定化があるからである。一方、環境改変(改悪)については市民は感性的に大なり小なり危険と捉えている。

・理念的情熱的行動；理念も感性と相まって、情熱的欲求の喚起で感性的行動へと進展することが多い。

・無償の行動；感性による行動は無償行動そのものであり、愛情行動やボランティア行動が情熱的となる。理性的範疇では行動はそもそも有償だが、感性が入り込むと無償になることも。

・無関心行動； 種々問題に対し有關心もあれば無関心もある。この違いは何か。安定志向の安定が損なわれるのではと危惧されれば、本来の関心事が予防的に無関心化するとみている。これを後押しするのは同質化による思考停止である。

3.4 市民側の環境

3.4.1 人間の位置づけ 推進側の生産性向上や利益追求の論理は、組織行動の専門家にはしっかりと受け入れられ、しかも関連する組織や体系そのものにも社会ニーズや時代ニーズに応じて加速と制御を行っている。

推進側の市民への対処については、市民が大規模化・複雑化した社会・組織・体系・専門家に囲まれ、市民の管理運営には人間が数とされがちであり、人間性や尊厳の影も形も見られなくなる。理由は、人間の感性や感情が数値に乗らないだけに、数理管理が実に都合が良いとされるからである。

3.4.2 市民の居住環境：市民にとって最新鋭の住まい環境である都市には、過密、高層化、自然を改変(改悪)等の問題があり、市民は不健全な環境下にある。市民には現在の住まい環境を受け入れざるを得ず、日々慣れされているのが実状である。この状況を変えようと某実務者団体が頑張っている。

3.4.3 市民の教育環境：教育環境には学校施設の近代化や技術革新の恩恵を受けていても受験競争は依然変わらず、格差社会を支える教育体制も変わりがない。加えて批判精神の無いモノ言わぬ人間育成が依然進められている。これでは個性や創造性に富んだ人材育成の掛け声は空虚に聞こえる。

教育でまず考えるべきことは、人間育成の根本には「教育は何のため、誰のため」である。ここがいつも素通りして、期待される人間とは、高度文明で恩恵を受ける人間や効率社会を支えるに都合よい人間となっている。以下に現状を見る。

(1)理工系中心教育；効率社会を支える STEAM 教育(科学、工学、技術、芸術、数学)がもてはやされている反面、社会系・人文系が不要という逆行ムードが静かに漂っている。このため根源思考できぬ人間育成がまかり通っている。問題は深刻である。

(2)歴史教育；教育は歴史真実をもとにした歴史を教えず、市民には事の本質に触れさせず、社会ムードに乗せるだけ。

(3)学校統廃合；少子化により学校統廃合が進んでいる。中一ギャップ解消とか、小学と中学の連携、等理屈が述べられているが、教育の在り方に迫るものはほとんどない。一方、少ないながらも小規模校では子ども視点で子どもに優しい教育が実施されていて、校則・規制のない環境のもとで、子どもは自由に体験を積み重ね、生き生きと生活を楽しんでいる。

4. 健全化に向け、組織の論理

4.1 市民から見た推進側の論理 推進側中心の社会活動では、時には社会の内部矛盾を放置とはいわないまでも矛盾の存在には触れずに、矛盾から噴きだした事象には対症療法的対応がなされている。こうした推進側の姿勢では、市民側の姿勢とは基本的に相入れず、両者間に軋轢が生ずることとなる。

(1)利益追求行為において、市民側への配慮(懐柔)として推進側の利益が回りまわって市民にも達するとの考えが「世の中、金はまわれば良し」とする風潮となって定着している。

(2)生産性向上や利益追求については、効率化のもとで管

理強化と異質排除がみられ、独創性・主体性(個性)・多様性も運営論理の範囲内のものとなっている。

(3)格差問題においては、そこそこの範囲内で格差許容の風潮がみられ、その一方ではユルビーリングによるハッピームードが格差を乗り越えるかの如くの幻想をもたらしている。

4.2 推進側からつくられる社会ムード、市民側から見る

(1)社会ムードとして各種概念の恣意的改変；推進側に差しさわりのある概念にはその本質をぼかすことが恣意的に行われている。

原発問題を例に。「安心安全」がことさら強調。一方で「安心安全」の反対の状態を「不安」としている。「安心安全」の反意語は「不安」ではなく「不安危険」である。また「迷惑をかけた」の本質は「迷惑行為」ではなく「危害行為」そのものである。

(2)推進側による社会ムード；推進側主導により TV や SNS 等のマスメディアを介してつくられる社会ムードについては、管理社会のもと同質化に加えて格差容認が市民側に押し寄せている。

社会ムードの今一つの困りごととして「市民へのかまい過ぎ」。市民のニーズの先取り・需要創出として、消費行動促進というサービスやイバーションが定着。これらはほぼすべてかまい過ぎ。本来はニーズ・発想は市民主体であり、市民感覚もムードには左右されない。

5. 市民側からの社会の健全化

5.1 暮らしを基本に

推進側主導の市民側への配慮には限界があり、社会の核心においては市民の存在が霞みがち。改善を考える。

(1)暮らししからの論理；暮らしに基づいて自然につくられる

(2)暮らしの延長；延長として街、地域、都市、社会があるとして、市民の考えを社会まで連続的に持ち上げる。

(3)暮らしに内在の要素；基本を暮らしに求めての内在要素

・暮らしには環境としてのコエティあり；人と風土の総体。

・暮らしは社会活動の基礎実践そのもの；暮らしには暮らしの環境や実践が積み重ねられ、(文化的にも)大きな力となる。

(4)暮らししからの街づくり；暮らしには健全な営みの街がある。そうした街には、風土風景、遠隔地ともつながり、歴史文化の底流あり、暮らししからの談義環境あり。

5.2 暮らしのありのままがセンスと気づき・学びに

暮らしの「ありのまま」とは、意図しないモードに乗せられ強いられることのないニュートラルの意味である。なぜこれが必要か。推進側の組織論理との対峙として種々の問題に対するカタチを行く見方ができると考えれる。また、社会においても目的化された各種行為とは別に(無目的化)感覚的行為により育まれる市民感覚の醸成が期待さ

れるからである。

(1) 市民センス(市民感性・感覚)；市民(社会)センスとは、暮らしという社会活動を通して磨かれ蓄積され身に付いた感覚の総体である。これより、社会のあり方や地域のあり方等に思考や行動の源としてセンスが発揮されることになる。

(2) 暮らしからの気づきや学び；人間教育としては、学校教育のように効率教育そのものを目的とした組織教育もあれば、特別に目的としない教育(教育というよりも健全な暮らし)もある。後者には、家庭における暮らしの中での気づきや学びがあり、これは成人の素養形成の源にもなる。

5.3 暮らしも効率管理化を超えて 推進側の生産性向上・利益追求に対して、市民側は如何にして自分流の環境づくりを遂行するのか(していくのか)を考える。まず推進側は、社会生産活動を自分側流にし、かつ学術特に工学をもとり込み、感性感覚を避けて数値処理に走り、管理・効率を深めている。市民側としては、根本的な改善には顔に見えるような工学の復権に期待している。なお、社会における感性的管理として社会ムードがつくられ浸透。

5.4 暮らしは人権 住む権利は基本的人権。良好な環境に居するも人権。市民視点での気づきや学びの充実も人権。

開発・再開発にみられる乱暴な進め方に異を唱える源には我らの住む権利(基本的人権)がある。これが常識となり、より深化して、今では最低限の生活を保障するレベルを超える人間としての豊かな生活を営む権利が人権そのものであるという考えに至っている。また環境権については、良好な環境の下で過ごせる権利として人間本来の暮らしが着目され、これより、良質な自然環境の下、自然の恵みを享受できて当たり前という風潮が静かに定着し始めている。

6. 市民力向上に向け

6.1 市民力行使 市民は基礎土壤からの活力(市民力)により街を社会まで延長させている。

(1)市民力の発揮；これには、行政などの各種施策策定への市民参加、市民世論形成、社会意識づくり(良識見識)に向け、世論作り、各種問題へのコミットがあげられる。

(2)市民力醸成に必要な事項；・顔の見える活発なコミュニティ。これは良好な環境(特に風土)が必要。環境づくりが肝心。・コミュニティ同士の連携によるネットワークとしてのコミュニティもある。・交流圏の拡大。細く広く張り巡らされた透き通った緩い関係性のある圏。そこにおいては自由闊達な議論と交流がある。

・市民力により蓄積された貴重な体験。これは歴史継承と将来展望であり、街・地域・都市への生活意識圏拡大の源となる。

6.2 市民側の土壤から行動へ。 (1)知性・感性土壤の醸成； 日常生活の営みが結果的に土壤づくりに寄与している。

(2)感性からの能力；研ぎ澄まされた感性が積み上げられ実践でもまれ、想像、予知、推察、観察、他の能力を形成。

(3)知性の姿；知性は個々の断片的な知識であっても繋がりながら集積したものとなる。また繋がりとは、例えるなら横に広がる触手と上下に伸びる触手の二元からなる。

(4)知性の研ぎ澄まし；知識の修得含め知性の研ぎ澄ましには、暮らしの中や自由闊達な語り合い場においても、自ら励むことができる。

(5)市民行動へ；市民土壤が醸成することにより市民行動に向けて市民力が増し、市民運動が沸き上がる。

6.3 市民の活動 市民活動には個人レベルのものと組織レベルのものがある。また組織運動にも二つあり、第一は市民の要求を勝ち取るという先鋭的な市民運動であり、第二は市民と近しい普通の組織が市民個人を取り込む運動である。

(1)個人行動；主に有識者がとる個人行動には、新聞への投稿、単行本出版、学会や関連の会誌に論文投稿、ユーチューブ、等での発信や、各種委員会としての意見表明、等がある。もちろん一般市民の場合でも論文投稿は難しくても、種々の発信や(委員会などを含めた)団体内での意見表明は可能である。また一人単独であっても市民運動はありうる。

(2)組織運動、眞の市民運動；これは市民の要求を相手から勝ち取る眞の市民運動であり、市民行動派が主導するリバーラルな住民運動でもある。こうした運動は市民会議と称され、市民の権利と生活を行政と対峙して自らを守るとされている。

(3)組織運動、市民啓発の運動；これは、大学や行政という組織の主催により、個人や複数人の市民の組織加入で構成される組織活動であり、本来の市民運動ではない。

(4)行政主導の様子；最近、世の中では市民参加がことさらPRされている。例えば、行政は種々プロジェクトについて構想の確定後に市民向けの内容説明でもって市民参加といっている。パブコムについてもしかりである。何かもどかしい。

その背後には、市民軽視の考えが見え隠れしているかのようである。行政側からは「市民を企画段階から参入させると、時間がかかり過ぎ思うように事が進めれない」といった本音が少なからず聞こえてくる。一方(ごく一部の)開明的行政職員からは、「行政は見かけ上の市民参加をいうのではなく、(眞の)市民参加に道を開き、市民に協力するのが本来の行政の姿である」と。

7. 市民系の思考総体、実践先行において思考から学へ

市民側の感性からの思考・行動の背景をなす思考体系

について、市民により馴染みやすくかつグレードアップも兼ねてこれらを「まるごと」束ね、市民哲学・市民社会学と称することにする(現代考学か)

(1)市民の思考と行動の一体化；感性からの思考・行動の背景をなす思考体系において、理性的展開を進めるには思考と行動の一体化を狙って、市民が自ら社会を念頭に思考することを市民哲学・市民社会学として位置付けることとする。

実際に市民レベルでは、街づくりの理論的バックボーンの根幹として市民哲学や市民社会学が受け入れられている。なお、これらは崇高な哲学や(文化・人類学)社会学のいわば市民側の市民版である。

(2)思考から学へ a. 知性や知識の感性を主とした様相；

・知識を繋がりある集積に、繋がりある知識が知性の深化に寄与

・理論よりも実践重視、エビデンスよりも情熱先行を

・市民軽視しない(効率重視しない)モデル化、顔の見える客観論を

・明確な体系の前段階に感性と知性との混合を

・ベストをつくすという工学の前提条件にも議論を

b. 各種思考をも関連づけながらも個々の事象も重視；俯瞰と深堀の中間域にあたるのが生活次元であるとする。生活次元(暮らし)を基に、上方向や下方向への眺望あり。また、体系についても同じように考える。個々の各体系を標準次元にして、いとなれば上や下への眺望が体系間の連携や総合・統合として自在へんげとなる。こうしておけば、連携とともに個々の体系そのものも輝くといえよう。

8. 足元からの市民運動

8.1 運動とその方向 諸問題解決に向けた運動について市民主導の考えを個々から始まる社会への運動として位置づけ、その様相や目標を述べる。

(1)社会において； 社会の根源的な問題として成長路線の批判から始まり脱成長を目指すことの論は別の機会に扱う。

SDGsについては、「持続可能」と「発展」の二方向にバランスをと謳われているなかで、「発展」を「環境や緑確保」に変えるという声が日増しに高まり、環境保全、緑保護、動植物保護、森の保護、農の自然栽培、等の取り組みが進められている。

社会諸矛盾については(公害、原発事故、環境改悪、歪教育、他)、社会の健全化として市民からの組織論理のパワーアップが待たれている。これと軌を同じくして、社会雰囲気向上、環境向上、恣意的ムード改善等の取り組みが功を奏していく。

(2)個人において；市民運動の前段階として個人でできるこには生活次元での改善があり、これには二種ある。一つは、上節に記したような社会での取り組みの応援として、個人生活で対応できるもののこと。二つには、個人

が理念に基づく運動として衣食住で工夫を凝らす(過度な文明に頼らず)こと。時にはやや超人的生活を実践する方、脱電力・非電力の生活を営む方、が少なからずおられ、日夜頑張っておられる。

(3)専門家について；技術者や学術有識者には市民の役割についても考えて欲しく、それと共に専門や学術の範疇において市民感覚でなすことともお願いしたい。これについては、専門系や学術系の組織論理が市民視点をより強固にしていくものと考え、ひいては市民に向け専門家による英知が広く伝搬し、技術の在り方が市民と共に生活次元で論議でき、さらに環境危機回避や人間性復権の問題にもより身近な問題として市民側からのパワーが期待できよう。

8.2 運動の形態 運動(改善運動)の形態には三種あり。本稿では下記項(3)の様相を念頭に置いて運動の着手としたい。

(1)社会全体での運動；大掛かりな社会改变運動は民主主義によってなされる。社会においては市民側から民主主義を拡散浸透させることになろう。一方、社会変革で取り上げられる教育については、文科省の教育行政の刷新が真っ先に必要と考える。教育行政そのものは政治が変われば変わるものであるから、そのためにも政治を変えなくてはならないといえる。

(2)問題別市民運動；環境改善の大運動・闘争には、市民からの広がる連携でもって各個擊破の勢いでいきたいものである。

(3)広範な市民活動；上記項目(1)(2)については、市民の知性土壌が市民による社会意識として充実し、これをもって社会推進派のつくるムードを変え、生活の営みの延長により市民意識を積み上げた活動が可能となろう。

8.3 市民運動への展開として 市民運動を沸き上がらせる市民基礎体力については、市民力の日常的向上を目指す理屈・実践として、市民主導による環境づくりが基本となっている。一方、市民活動においては、問題の重要性は分かっているものの次への一步が踏み出せないことも多々ある。これには、暮らしにおける市民本性(感性や知性)が妨げられているとして、暮らしにおいて本性を磨くことで改善としたい。

8.4 ごく自然体で 環境危機問題に向けての取り組みとして「自然体での市民生活ありき」や「市民生活の営みの延長に都市や社会がありき」をもとに基礎土壌づくりを考える。

(1)市民と組織・社会の枠組みで；市民の土壌には、市民生活の営みによる体験と積み重ねがある。すなわち、個々の生活や街の生活の営みが、地域、都市、社会において積み重ねられる。これが市民側の組織論理であり、推進側論理と併存としたい。

(2)積み上げるもの；市民が何処でも日常的に体験を重ね

つくりこんだ感性は、市民行動に際し感性先行を誘発させ、また感性の知性への転化となれば、知性先行となる専門家行動とともに両者の関係が良好につくられよう。こうした感性や知性が慣習・論理へ、さらに組織論へと発展し、推進側の組織論理や組織人の行動基礎とは別に市民側が自ら作る市民視点の慣習・論理がきわだった存在となろう。

(3) 変革に向け；変革というよりも街づくりを基本したい。なぜなら日常的にあるがままが足元から沸き上がっている場が街だからであり、街が変われば地域が変わり、行きつく先に社会がある。この観点で全国各地に動きが活発化しよう。

- ・街づくりは市民のあるがままに構成できる。
- ・気づきや学びや良い体験の積み重ねが小規模な街では可能
- ・コミュニケーションのコミュニティとしては街の中でコミュニケーションが行き交う自由闊達の場や各家庭や小さな職場のコミュニティを支えている。

9.まとめ 諸問題の解決に向けてた問題対処行動や問題別広範行動について強力に支援する場合には、行動・運動の前段階における市民側の活力(基礎体力)が大きに期待できると考え、ここに基礎体力及びその周辺のあるべき姿を明らかにした次第である。以下に議論結果をまとめる。

(1) 社会づくりにおいて組織論理や社会システム論理に対峙して市民論理が位置付けられる。市民論理の根幹は街づくりであり、街づくりを基に社会づくりへとつくりあげられる。

(2) 暮らしは社会活動の基礎実践を自然体で担っている。これが感性や知性の基礎体力となり市民力の形成へと繋がる。

(3) 暮らしの延長として街・地域・都市・社会をつないで、これに市民感覚の拡張と市民主導が組み込み可能となる。

(4) 市民自ら知性・感性のパックランド(土壤)を醸成。よりパワーが増した時点で市民運動へと展開できる。これが大規模市民団体との合流や個々の運動へと繋がっていこう。

(5) 市民力向上には、暮らしの中でのコミュニケーションのコミュニティが関わり、市民土壤づくりの場となる。

(6) 市民側からの思考・行動は、暮らしと社会を念頭に市民系の学「市民哲学・市民社会学」へと結実していくであろう。

▲補足；・本稿では、諸問題への解決を即目指している訳ではなく、解決に向けた市民基礎体力を養うことに重点を置いている。これによって社会的なセンスが磨かれ、社会の不条理を的確に捉えることで問題解決への準備として勢いが増すと考える。

- ・環境危機が市民側には実感として伝わりにくい。これについて少しでも尽力したく、本稿にて論を展開した。
- ・今後は諸問題における社会的根源について準備したい。

・本稿はあくまでも設定問題を包括して物語化を目指したものであり、諸問題における社会的アプローチからの深堀も含め、詳細な検討は今後の課題と考えている。

【2】コミュニケーションのコミュニティ

1.はじめに

コミュニケーションの重要性はいうまでもない。コミュニケーションの活用としては、最近流行りの仕事への活用術としてコミュニケーションテクニックを連想しがちであるが、ここでは個人の能力向上や社会的な交流のためのコミュニケーションの活用に着目する。これは、社会的基盤づくりそのものの遂行にあたると考え、そこにおいてコミュニケーションで形成される場をコミュニティと位置付けてコミュニケーションのコミュニティ(以降、単にコミュニティ)と呼ぶことにする。

本稿では、コミュニティに着目し、コミュニティの種類、様相、機能について考察し、これらが社会的基礎体力づくりにどうかかわっているかを論究する。ただし、基礎体力=基礎土壤とする。

2.問題の所在

この世の中、分断化、同質化、人間関係希薄化、等が進む中、一方では事態の改善として期待されている個性や独創性の発揮が残念ながら枠内(組織内)に限定されたり、しかも社会運営においても、個の尊重もまた全体の利益優先のうきめにあい、市民にとつては閉塞感を感じざるを得ないのが実状と考えられる。こうした時代背景のもと、意外にも若者はもちろんのこと中堅やシルバーも枠を広げたコミュニケーションに活路を求めており、議論よりもまとまった対話の場に人気が集まり、2010年代後半からはこうした動きがブームとなっていた。

そうした状況は、コロナ禍にもめげずに新たな展開を求めており、この流れに沿つて本研究の立場がはからずも浮かび上がってきたと思っている。

3.コミュニケーションのコミュニティ概説

3.1 人間環境

一般には環境は、自然環境と社会環境の二種といふが、人間の人間らしい行動からなる環境を人間環境として、独自に設定する。なぜそうするかといえば、人間どうしてコミュニケーションを交わし人間の思考・行動がつくられることはあたかも人間を中心とした環境そのものであり、これを特別に人間環境と呼び、そこには話し合い・語り合いが構成できるとする。

人間環境(人的環境)には、家やご近所さんの基礎集団や街、地域、自治体、学校、企業等の機能集団まで含めているが、どちらかというと小規模を前提とした環境を対象としたい。よって、人間環境においては、コミュニケーション

中心に人間が集まれば、そこはコミュニティと捉えることになる。(次節)

3.2 どこでも人が集まればコミュニケーションのコミュニティ

コミュニティは話し合い・語り合いが成立すれば、どこでもがコミュニティである。このように考えれば、(上節の再記だが)家庭、地域、学校、職場などにおいてもコミュニティが設定できる。すなわち、街のコミュニティとして井戸端の場(溜まり場や道端も)はもちろんのこと、家庭では囲炉裏の場(団欒の場)であり、職場での仕事を離れたコミュニケーションの場である。こうした場におけるコミュニケーションが街・地域さらに上位へと沸き上がっていく。

3.3 コミュニティの種類

コミュニケーションについては四種類を以下のように設定する。

- ・暮らしの場
- ・何の繋がりもない自由意思で臨む自由闊達な場
- ・機能的集団のなかにも小規模系で置かれている場
- ・上記三個の場を統合・総合する場

第二から第四までの場を広い意味では暮らしとしたいが、ここではあえて四個は独立場としておく。以下には、上記コミュニケーションの様相を列挙する(再掲)。ただし、暮らしには、仕事や学びの休息場も含めた。

(1).暮らしの中でのコミュニティ

- ・家庭では、囲炉裏(リビング)の場にて家族団欒。
- ・街では、井戸端(地域のパット)の場にて自由歓談。
- ・職場では、仕事上のものの他には余談・雑談・歓談。
- ・学校では、休み時間などの日常歓談。

(2).自由闊達なコミュニティ、地域にて； これは社会的な広がりを持った基本な場であり、地域に存在。(語り合いが主である)

・街(平場)においては、各地の朝活、種々のカフェ、論議対象を絞ったカフェや勉強会もある。これは専門の会に見えるが、市民主導としてやや広い域の場である。

(2').自由闊達なコミュニティ、目的有の場； 暮らしの一環として市民主導による知的交流と市民力向上が目的である。この目的でも、語り合いのチャンスと場における自由な語り合いが可能である。なお、朝活とカフェの違いには、対象(分野)を設定するカフェに対し、朝活はすべてを対象することにある。

(3).自由闊達なコミュニティ、専門家集団内での小さな場；

専門の集団の中にも存在する小規模コミュニティとして、学生、実務者、専門家が自由闊達に場を持つこともままある。この傾向は、学術団体が市民と学との連携として市民には開かれた状態にしているので、場の形成は比較的容易である。例えば(著者が関与している)建築学会においては；

実務者討議の集い、

学生による語り合いのシンポジウムがある。

この他、種々の場があるとは思うが、著者は集約してい

ない。

(4).コミュニティの積層； コミュニティが家庭や地域にあり、職場や学校等にもあるので、人間は至る所でのコミュニティと繋がっている。そこで、こうした様相をコミュニティの積層と呼んで、これらを一括してコミュニケーションの大きなコミュニティとしておく。すなわち、各コミュニティ(家庭、街、地域、職場、学校・団体、等)が枠を超えて多様に繋がるとしている。なぜ積層としたのかについては、小さな規模から大きな規模への実績の積み重ねが、積層コミュニティの中で可能となるからである。

(5).補足； 市民力の向上を謳う市民への啓発活動として、行政や大学などが実施する市民教育の場があり、これらは市民大学講座や市民塾などと呼ばれているものの、市民主導ではないことはいうまでもなく、その意味ではコミュニケーションを楽しむということもなく、学習の範囲のものである。これと対峙するコミュニティには、暮らしの一環としての知的交流がコミュニケーションのコミュニティである。(この他は見当たらない)

3.4 コミュニケーションの円滑には

市民主導による市民のための場が大前提である。

(1).進行の主導； 市民の自発的発言について、自発あってのコミュニケーションであるので、発言を促とか引き出すといった第三者による行為は無用である。このためか、朝活とか問題設定しないカフェでは、コミュニケーションが自然と盛り上がるものである。

これに対して問題やテーマを設定するカフェでは、進行の効率化や効果の追求として、コディネーターやファシリテイタの主導のもと、市民の声を最大限引き出し、設定した方向に事を集約させているカフェが結構多い。確かに、そこには市民の気配はあるものの、発言にはガイドラインに強いられぎみという感はぬぐえない。もちろん、そうでないカフェも多い。

(2).場における公平性； 朝活では、政治(選挙)、宗教、ネット販売、男女交際、他を目的とする参加は禁止となっている。また、誹謗中傷はまま起こりうるので、そうした行為にも参加者の協力を得てチェックしている。

カフェでは、進行において変容と傾聴を基本としている。すなわち、相手の意見に反論でなく先ず聞くこと、自分意見にこだわらず変わってもいいという柔軟性を持って会に臨むこと、としている。なぜか。背景には、カフェは朝活と違って問題をかなり奥深くに迫ることもあって、各自の見解や考えが割合出やすいことがあるためである。

なお、カフェでの公平性問題については節6(1)にて論ずる。

4. 自由闊達なコミュニティ、富山における知的交流詳論

4.1 概要

市民向け暮らしの一環としての知的交流(コミュニケーションのコミュニティ)には、市民が運営する街の知的コミュニティである「朝活」と「カフェ」が人気の的であり、人間の生き方から時事問題まで広範囲なテーマにて市民社会の素養向上が結果的に担われている。また、専門的テーマの研究会でも、自由闊達

を保持している市民のコミュニティも結構あり、カフェ文化が市民の知性の形成ともなっている。

著者の地元富山では、朝活とカフェを合わせて 10 個以上の盛況の場を次節にて紹介する。

4.2 朝活(写1、表1)

もともとの朝活は東京で(2009年)発足し、ラジカルに差をつけるためにビデオ会議を磨くことを目的としているが、富山ではビデオよりも人間性磨きに重点が置かれている。これが、自宅と職場の往復に飽き足らない若者方々には大いに受けており、朝活の話題も身の上の話から政治的な次元のものまで多岐多様としているからこそ、参加者同士が話し合えたことに大いに満足されている。なお富山では、朝活富山が 2009 年に、朝活上市が 2014 年に発足し、今も活動を続けている。

以下に様相を列挙する。

- ・朝活概要；モーニングサービスを食して会場が和んだ後に知的交流。会場は喫茶店。コロナ禍以降、リアル開催を避けリモートとなり、これまで県内の方のみの参加が隣県や関東・関西圏からも多くが参加されるようになった。参加者はリアル期では多いときは 40 人、平均 20 人程、リモート期では多い時は 20 人、平均は 10 人程である。
- ・テーマ；個人ベースで自分がどう問題を設定し、どう取り組んだのかを、プレゼンテーション中心もしくは全員で話し合われる。

表1 には、これまでのテーマを分類して示しておく。



写1 朝活上市会場風景

表1 朝活上市テーマ整理

テーマ分類 数字は開催回数、コロナ以前に集計、全114回	
大分類 小分類	
人 21	人 10、人生 11
体 22	健康 05、食 06、ボディ 11
生活 13	生活 09、旅行 03、レジャー 01
仕事 13	仕事 08、農業 03、福祉 02
勉強 07	勉強 07
芸術 11	芸術 04、音楽 07
自然 07	自然 02、植物 05
地域 20	地域 08、コミュニティ 05、交流 03、歴史 04
他 01	技術 01

- ・参加者；若者や主婦を中心。開催は月 1~2 回、週 3 回あり。
- ・進行；プレゼンテーションが進行役を務めるが、コーディネーターはしない。
- ・効用としては； 自身の考えや人生をもとに歓談することで、自身を相対化し、活力を得ることになる。

4.3 カフェ(写2、写真3)

県内では2000年頃から発足のカフェが次々と閉店し、2013年に開始のカフェ(街中ゆったりカフェ)が今に残るカフェでは最古参であり、その後に哲学カフェが 2014 年に開始し、憲法カフェや社会科カフェが後追した。

街中ゆったりカフェだけがコーディネータ無しの参加者全員による進行で論議を楽しんでいる。他のカフェではどうしてもコーディネーターなどが進行を仕切っている。なお会場は公的機関利用。



写2 街中ゆったりカフェ



写3 社会科カフェ by 社会科カフェ HP

以下に様相を列挙する。

- ・カフェで討議対象を限定；専門に特化した市民の集う場として、科学カフェ、建築カフェ、哲学カフェ、社会カフェ、憲法カフェ、等がある。
- ・テーマ；社会問題のなかからいくつかが取り上げ設定されているが、設定なしの場合もある。テーマ例は；豪雨災害、地球環境、ゴミ問題、椎名道三、腰痛、ばんどり騒動、米騒動、古墳、古代史、剣岳登頂、他
- ・参加者；専門テーマのカフェにおける場合でも一般市民が参加し、自由に語り合う。
- ・進行；勉強会の様相であっても語り合いを通して進行は一方向にあらず。ファシリテーター・コーディネーターを不要とするこもあり。
- ・効用としては； 断片的知識が各自の中でつながりをもって知のストックになり、自らの発信や他者の受信の貴重な場となっている。また、市民社会の素養向上を謳う目的設定の市民教育との相乗効果もある。

5. 実際に運営の場や会

5.1 運営の様相

場や会の運営には、思いを持った人が世話をする。こうした世話人はコミュニケーション仲間として互いに緩く繋がっている。著者の場合、いくつもの会を主宰するが、他の方の主催の場にも応援として連携として参加している。以下に、実際に著者が関わる場と活動を列挙する。印*は全国区の場である。

- ・個人運営；小規模ゆえ世話人はほとんど単独；
朝活上市、街中ゆったりカフェ、富山地震防災研究会
- ・集団運営；仲間が世話人となり集団で；
学生シポジオン*、実務者討議の集い*、
「災害と社会」研究談話会*、人新世人類統合研究会*、
滑川宿街並み保存と活用、おおかみこどもの花の家
- ・参加者として支援(著者の朝活・カフェ等との連携)；
コミティ連携として、世話人同士互いに相互交流。
歴史カフェ、社会科カフェ、憲法カフェ、
哲学カフェ、ワールドカフェ、朝活富山、朝活呉西(最近閉店)、
富山の建築おしゃべり会(最近閉店)

5.2 連携において

著者らの場と他者の場との相互乗り入れの形で連携している3つのカフェについて紹介する。これらのカフェでも基本は市民主導、市民感性磨き、である。ただし、コデイネータが場を緩く仕切っている。

(1)社会科カフェ(写3)； もともとは政治に関心を持つ市民が増えることを期待して、政治の観点から社会における種々の問題を論議するもので、結論を得ることよりも議論することにより、種々問題の源を知り、解決に向けたセスを磨くのが目的である。

進め方については、場にはある程度の情報提供としてプレゼンタが問題解説を行う。問題の位置づけと共に、どんな方法がこれまでどうアプローチされているか、何が得られているのか、を現状の段階として説明が続く。その後は、直ぐに討議になり、プレゼンタは仕切ることはなく、参加者は、各自の反応、社会的意味を述べあうのである。もちろん、最後においても方向性や結論は場としては無く、各自思い思いで納得すれば十分とし、その意味でも多様性・自律性は徹底して確保されている。ちなみに、これまで論議の課題については、富山はエデンか(福祉社会において富山がとやま型福祉政策をしていることにエデンと重なるのではとの論)、経済から家族を考える、等。

(2)憲法カフェ； 憲法カフェは、兄弟分で憲法9条を守る会とか改憲反対の会などとは軌を同じにしていたが、狭い地域では憲法のみで論議を進めるのは難しく、結局街なかの問題に関する討論会となっている。テーマも、人に優しいオガニック、農業問題、コミュニケーションの本質、公害問題、徴用工問題、等

(3)哲学カフェ； 哲学カフェは全国至る所にあり、哲学の勉強

として体系的な哲学学習もあれば、時事問題をじっくり語り合う場としてのもの、哲学をじっくり語り合うもの、など多様である。富山のような小さな圏域では、哲学カフェは一箇所しかないにもかかわらず、市民同士がじっくりと語り合えるので、哲学カフェの人気は高い。

扱うテーマについては、人間とは、時間とは、宇宙とは等の哲学本来のものを扱わない訳ではないが、生きがい、愛、責任、等日常のものに人気がある。これまでのテーマを列举する；ベーシックインカム、デア、グローバリズムとナショナリズム、流通、愛、地域とは、AI、新自由主義、パンデミック、他。

6. 社会的基礎体力づくりへ

社会的基礎体力づくりはコミュニケーションのコミュニティづくりと街づくりから成るとしている。(本稿で扱わないが)街づくりについては、街や地域で磨かれる感性からの思考・行動による体験の積み重ねが地域やその上位の枠組みへと沸き上がっていくと考える。コミュニケーションのコミュニティについては、コミュニティにおける各理屈の学びもさることながら理屈の背後にある感性の磨きに潜在的ニーズがあり、これが各種のかつ積層のコミュニティで梯子することでより多様な状況にも対応可能な感性へと磨かれ、社会的基礎体力へと進化していくと考える。

こう述べるとすべて順風満帆のように見えがちであるが、実際には、規模にかかわらず、(一部参加者からの)見解の相違や偏狭な見解により、会の進行や公平性に支障をきたす問題もある。一部カフェにみられるこうした問題について、議論の公平性の観点で検討し、次いでそこから浮かび上がる意見とそのバックボーン(思考土壤)について論考する。

(1)公平性議論； コロ禍あけの時期に某カフェにおいて、参加者各位から会運営について「あまりにも偏った意見が正論であるかのように断定する押し付けは不条理」の指摘が相次いだ。この種の問題はどのカフェでも大なり小なりあり、時には大激論にもなることがある。

ではなぜそのような問題が生ずるのか。これは会に集まる方々の時代反映の考えが深化し、年齢とともに諸知識を会得して自分流に考えを組み立ててきた結果と捉えている。

公平性保持への対処については、第一には誰にも異論の無い問題に限定してきわどい発言が出ないようすること、第二には特定発言を差し控えるように参加者に同意をいただくこと、第三には特定発言には対峙する発言で応酬すること、が挙げられる。このうち第三の対処が両論併記・両論発言としてカフェの開催目的に合致しているといえる。

(2)意見の背後には； 問題にしたいのは、偏狭な意見がどうして出てくるのか、偏狭な意見は広範な意見との違いはどこにあるのか、それは意見の背後にある思考土壤との接し方にある。土壤から何かを見いだし発掘となると向き合う人間の素養が問題となり、種々の都合で恣意

的に対応するなら、結果として都合のいい狭い土壤が形成されることになる。例えば、種々範疇の前提条件疑わず、歴史認識の一方的押し付け、社会システムへの忖度、利害関係を持ち込み、科学技術でも客観事実に基づかない論調、等、枚挙にいとまがない。

そしてまた今ひとつ問題として最近の SNS や YouTube によりフェイクも含め情報洪水や情報漬けがあたかも公平な市民の声といわんばかりに市民社会に押し寄せているものもある。すなわち発信者側からは、市民や専門家で作り上げている土壤の全体を見ずして、自分に都合のいい見方を相対とせず絶対として世の中にはらまき、世の中における偏狭な姿勢が合理性を持つかのように仕向けてもいる。

その一方では、こうしたことを容認するかのように、フェイクや無根拠があっても市民の方で取捨選択をすればいいとの不用意かつ安易な論も一部にあり、世の中における不条理がますます増えてもいる。確かに、世の中へドアが盛り上がりければ何でも良しといった根強い風潮もあるだけに、改善にむけて、市民はできるところから、専門家は良識見識に基づいて行動して欲しいものである。その意味でもコミュニティの役割は大きい。

7. 学術世界での市民感覚のコミュニティ、建築系を例に

市民感覚を持つ学生、実務者、専門家のコミュニティを扱う。

7.1 学生・実務者中心のコミュニティ

学会は今でこそ市民対象は当たり前となっているが、2000 年以前には市民への配慮は謳っていたものの、学会に結集する学生や実務者には今ひとつ光があたっていなかった。市民への対応はもちろんのこと、学生や実務者にも配慮が日々の課題として学術の世界においても自律思考があるべきとして、討議の集いが 2002 年か



写4 学生のシンポジオン
ら、シンポジオンが2004年から毎年実施されるようになった。

こうした場も、学生や実務者が主体のコミュニティそのものであり、多くの方の支持を得て今なお継続されている。

(1)学生によるシンポジオン(写4)； 学会では、集まる学生への対処としては研究・教育面においての配慮はあるものの、学生の人格形成や基礎素養の育成は不十分として、北陸支部では 2004 年から、全国大会では 2007 年から学生主導で知的交流の場をつくり運営がされてきている。学生主導が毎年実現させるのは困難となっているが、それでも学生主体は踏襲されている。なお、本企画において学生は、志教育としての知的交流の楽しさを満喫され、貴重な体験をしておられる。

(2)実務者討議の集い； 新社会人・若手社会人として実務者に光をもっと当てるべきとして実施されているが、最近はコロナ禍もあって休止中である。学会では自由闊達に実務者中心にして学会人との知的交流は大変珍しく、これまで結構盛り上がった。なお、会は学会内にて実務者地位向上の運動よりも、自由闊達な実務者の存在を地味にアピールし続けていた。

7.2 専門研究者主導の自由闊達コミュニティ

専門研究者は活躍の場を関係の学会に求め、学会を介して種々コミュニケーションが図られているが、好奇心旺盛な各位は学会の枠から飛び出して自由奔放・自由闊達な場を自ら作り活動活躍している。著者の知る勢いある二つのコミュニティを紹介する。

(1)「災害と社会」研究談話会； 前身は建築学会 2017 年設置の特別研究委員会であり、ここに多才かつ異色な方々の結集により、多岐多様・自由奔放の精神がいかんなく發揮されていた。その後 2019 年設置の特別研究委員会(第二次)をへて 2021 年度から任意の研究会に模様を変えても何の拘束もなくやりたい放題の展開となり、時には発散傾向さえもドン欲に取り込んで異色な存在として今日に至っている。

(2)「人新世人類統合研究会」(略称は星野研究会)； これは、2023 年設立され、地球環境危機による人類絶滅をどう回避・解決するという大問題について早急に研究かつ実践で対応するとしている。そこには、研究と実践を両輪とする多才・多様な方々が結集されており、単に研究レベルに収まることなく、環境危機に向き合っている。現在は気候変動が臨界点を越えてジンジリと押し寄せる気候大災害をどう防ぐか、研究と実践を行っている。異色な人材集団だからこそ問題に対処できると皆さん、意気揚々である。

8. おわりに

もともと市民の対外的な自由を求めてコミュニケーションの場とチャンスをつくることから場づくりを始めて 20 年程、今ではこれが市民層の社会的基礎体力づくりの重要な一つと位置付けて場を運営してきている。そこでは、世の中では分断化、同質化、思考・行動の矮小化、等のためか思

考停止ぎみが大いに気になるところではあるだけに、自由闊達なコミュニケーションへの期待が大きく、コミュニケーションのコミュニティはゲームが過ぎたとはいえ、少しずつ着実に力をつけていくことが実感される。

実際の具体的な運動として著者は、市民向けには、暮らしの一環としての知的交流(コミュニケーションのコミュニケーション)の場づくり・場運営を市民主導として展開し、特に街の知的コミュニケーション「朝活」と「カフェ」に力点を置いている。そこでは、人間の生き方から時事問題までの広範囲なテーマにて市民社会の素養向上を図っている。それともう一つ。専門的なテーマの研究会でも、自由闊達を保持している市民のコミュニティを支援し、カフェ文化が市民の知性のオアシスとなっている。以下に議論をまとめる；

(1). コミュニティの場とチャンスが日常化し広がること及びコミュニケーションにおける対等感と各自の作り上げ感により、市民は(どの年齢層も)コミュニケーションに期待を持ちかつコミュニケーションの良さを実感している。

(2). 問題の根源からの市民思考は語り合い(コミュニケーション)を基礎にしている。これがコミュニケーションをつくり、どんなコミュニケーションであっても社会的基礎体力づくりそのものとなる。

(3). 市民の自由闊達なコミュニケーションのコミュニティが、各種のコミュニケーションと積層して大きなコミュニケーションをつくっている。街中のコミュニケーションが地域やさらに上位に位置するコミュニケーションに向け積み上がっていく。

△ コミュニティ論については今後、コミュニケーションの一層の充実化に向けて論考することにしている。

A. 参考文献 1) 富樫豊：実務者中心の研究者・教育者との本音のディイカッション、”2002.8.3 実務者討議の集い”まとめ集、「21世紀の教育に向けて生涯教育小委員会からのメッセージ」、日本建築学会生涯教育小委員会、2003.3, pp. 112-119
2) 富樫豊、栗原知子；学生による語り合いのシンポジウムについて、日本建築学会北陸支部研究報告集、63号、2020.7

【3】街づくり

1. はじめに

著者は今日的な閉塞感のある社会の健全化に向けてどうすべきか長く検討している。なぜこの種の問題に対応するかといえば、地球環境危機の問題がここ数年特に緊急性を増してきたからである。解決としては、市民の日々の暮らしの健全化を目指して小規模で身近な次元からの街づくり・村づくりに期待すべきと考えた。もとより街づくりは、街の活性化の一環として観光や伝統保存等に加え、生活環境向上や環境保護についても取り組まれ、成果を上げている。これらの街づくりは身の回りの事のみならず、究極的には社会を支える地域活動として位置付けられてもいる。

本稿の目的は、大上段に社会そのものを議論するのではなく、身の回りの活動が如何に社会づくりとつながりを持っているかを明らかにすることにある。すなわち、社会的基礎体力を街づくりから作り上げる過程を論究する。具体的には、理念を述べ、次いで事例検討として基礎体力的な視点から富山におけるいくつかの街づくりを概観・分析し、今携わっている中山間地域の小さな村づくりと街道筋宿場町の街づくりについて実践を報告する。なお、本稿では、街づくりを地域おこしや村づくりをも含めており、また基礎体力を基土壤礎とイールとした。

2. 社会的基礎土壤づくり

2.1 問題の所在

社会の根幹に関わる大問題として、人口減少、少子高齢化、格差(貧富、貧困、他)、環境危機(開発、再開発、温暖化、他)、等がある。これに対処するために、世界はSDGs運動を推し進めているが、2030年ゴール到達はかなり難しいともいわれている。それだけに、後継の運動として環境(Environment)保全を中心据えたSEGsがささやかれるようになってきた。それとともに、足元からの活動に期待が高まっており、地域づくりや街づくりを全国各地に展開しようという動きも見え始めている。本稿でも、上記の考えをもって問題に対処することにした。

2.2 基礎土壤づくり

基礎土壤を育む要素にはコミュニケーションと体験を積む街づくりがあり、これらの育み場所がコミュニケーションであり、コミュニケーションのコミュニケーションや街なるコミュニケーションがある。本稿ではコミュニケーションをそのように位置付した街づくりを取り上げるが、ここでいう街づくりには暮らしそのもののコミュニケーションが基礎土壤となっているとする。なぜなら、そもそも社会は個々の生活の関連させた集合体といえるし、社会は個々の世界の積み上げと捉えているので、身の回り次元での街づくりがその任を担うといえる。また、どのような種類の街づくりでも始まりは基礎土壤づくりであり、身近に小規模から始まる地域の声が結集すると考える。

3. 街づくり一般

街づくりは、地域の身近な事柄から成る主体活動であり、基礎体力に関するものと考え、これまでの街づくりを展望して、街づくりと基礎体力との接点を見ていく。

3.1 地域活性化

街づくりは一般には街の活性化として進められている。この観点で扱われている事象について記す。

(1)地域活性化における

- ・必要性；人口減、生産減、賑わい減、の対策
- ・目標；人口増や関係人口増、地域の富蓄積
- ・方策；賑わい創出、人口増加・人間集積、生活・生業確保

(2)具体的な取り組み

- ・地域におけるシステムの充実化
 - ・地域における産業振興
 - ・移住促進；人を引き付けて街域の人口増
- (3)取り組みの陣容形態
- ・連携には；産官学民連携、学民連携、官民連携
 - ・単独では；学先行、産先行、民先行

3.2 街づくりを構成する要素

- 上記の視点でもって、そもそも街づくりにおける種類、主体、手動、支援、活動について記す。
- ・種類；賑わい、人口増、住みやすさ追求、生産増進
 - ・主体；住民、地域(地域民)
 - ・主導；市民主導、市民と専門家(支援、準主導)の協働
 - ・支援；大学、研究室、コサル、企業、行政
 - ・活動；特産開発・販売、農業、植林、他

4. 街づくりと市民の意見

- (1)街づくりと住民； 主導者側の街づくりの意向に沿った推進については、多くの住民の賛同を得ないばかりか、突出した様相になることがままあり、すべて順調のように見える取り組みにも種々意見がある。以下に記す。
- ・街づくりというと直ぐに賑わいをとして観光に走りがちだが、住民の住もう充実の観点があれば、たとえ観光化を目指しても奥の深いものになるはず。
 - ・街づくりで人集めの策を練った後に出てくるのは、金の落ちるシステムを考えること。直ぐにマネー中心。それでいいのか。
 - ・住民の充実生活に目を向けた取り組みが少ない。本来の街づくりは住環境の充実であり、そこに生産が入ると考える。

- (2)地域おこし(地域づくり)と住民； ・地域づくりは街よりも枠が大きいので、どうしても産業の取り込みが主になることにより、人が集まればいい、マネーが集まればいい、といったことになりがちである。ここは、街づくりとして住民の身近な活力が主体になるような方法を考えるべき。本稿では地域づくりも街づくりに含める理由はそこにある。
- ・街づくりを健全に進めねばその勢いで地域づくりにも反映させることができるはず。それゆえ地域では地域事情が街づくりを変えることなく、地域と街との併存を目指せる。
 - ・地域おこしの際には、住民の存在が霞みがちである。特に地域おこしではすぐに企業誘致・工場誘致、観光推進、だから。

- (3)過疎地域の村づくり； 街づくりでは、そもそも広がりのある街が対象。しかし、村では経済的基盤が脆弱ゆえに、街づくりのような訳にはいかず、却って村ごと移転になるか、村全体での観光化や産業化を目指すことになり、時として危険施設受け入れといった危うさが生ずることもある。

5. 街づくりの遂行に際し

街づくりの遂行には、中心になる方々の発起で市民が集まり、そこに学術や企業や行政が加わるといった構図になる。学術、行政、企業の関わり方として、支援、応援、肩代わり、主客転倒などがある、これについて述べる。なお、支援先や支援内容については以下のとおりである。

- ・支援先；地域、文化財、コミュニティ
 - 支援先の人 地域民、行政、
 - ・支援の内容； プラン策定、人集め、資金集め、遂行プラン
- (1)主体者、発起人の方々；地域に住むフリーな立場の建築の方々(個人設計者や研究者)や開明的な有職の方々(教師や農業者等)、街づくりに関心ある移住者方々が割合多い。これらの方々は移住者含め地元在民であるので、地域への思い入れも深く大きい。
- (2)学術からの支援；・1960年代の公害闘争や開発反対闘争以降、1970年代の積極的対処として良い街づくりが始まった。その後、大学は地域貢献として地域に積極的に関与し始めると、学民、官学民、産官学民として連携がとられるようになり、学生や市民の若い力が中心となつていかんなく地域を支えるようになってきた。もちろん学がバッガボーンとなっている。

・学術の役割について；教育的役割として、次の時代を担う学生の地域から学びや地域にて学びの実践が当たり前となり、街づくりの体系や社会での位置づけや研究成果の実装が現実化してきた。地域にとっては、学術からの支援はありがたい限りである。しながら、地域においてある程度形ができると、研究者の撤退が始まることも結構あるという。

(3)職業人の関わり； 学術従事者も職業人と捉えられるが、ここでいう職業人は、街づくりを専門にする企業人の事であり、コサル系各位を指している。もちろん建築系の方々も結構入っている。彼らは、街づくりを発議することなく発議者を助ける役目であり、研究者とその意味では変わりはないが、違いは報酬の有無である。だからといって報酬の大小で仕事の重い軽いの規定が先行することはあまりない。しかし、企業の仕事では街づくり仕事の終了とともに企業が撤退していくので、「後の火事としてかかわりを」との地元の声も多い。

(4)行政の役割； ・行政は、学術の支援を不要として街づくりを実施することもままあるが、その一方では学術の英知と共に街づくりを実施で頑張ったり支援にまわったりしている。後者の場合には、もちろん官と学との連携があり、知恵や知識だけではなく、時として学術との連絡協定を結び、常時支援を可能にするケースが増えている。

こうした動きは最近始まったのであり、以前には学術からの人材派遣(派遣というより学生が飛び入り)がままあった。例えば、長野小布施町では慶應大学から派遣の

若手が町長の右腕として働いた(支援した)。その後その方は小布施町長に就任し辣腕をふるっている。

・行政には気になることがある。行政主導で街づくりを進めるといつても、ノウハウを外部に頼り、時として進行までも便利屋コンサルタントやバンブーディユーサ会社に丸投げのことが多い。このためもあって、街づくりには真摯に市民の声を聞くことが少なく、あるのは関係する市民の声のみを聞くに過ぎないこともあるという。・官民連携については、都合のいい一部の民を対象とし、本来頑張っている民には冷たい対応もままある。

(5)企業のかかわり； ここでいう企業は街づくり会社ではなく一般の企業であり、街づくりを応援している企業である。

・小松製作所は、小松市での地域おこしに社員の地域貢献として、勉強や遊びや祭りなどに積極的にかかわっている。

・高知の神山村では、特徴ある街づくりを地元有志が中心に戦略を練り、町全体に光ファイバーをめぐらし開明的企业の定着に向け整備していた。2010年、IT企業が本社を東京から神山に移転し、移住の社員は業務を遂行するとともに、地域貢献として祭りや環境保護等に精を出している。地域と産業との連携が功を奏している。

・以上の2例はかなり特殊と言え、今後に向けてのパワートーストとなっている。なお上記以外にも特徴的ケースはまあある。

6. 富山における街づくりと環境保全

ここでは対象を日本全国ではなく富山に限定し、しかも大規模な観光や街づくりは割愛して小規模系に絞ることにする。また街づくりには、これを支える環境づくりや環境保全を含めることとした。

6.1 富山の地勢

富山は割合コンパクトな広がりの県域であり、程よい広さの平野があり、この平野を挟んで海と山が接近している。山から平野と海が見え、海や平野から山が見えることから、富山まるごと感が自然と育まれている。さらにいえば、田舎は自分の家、富山は我らの街、富山は我らの庭といった感覚で、自然環境・地域環境が捉えられている。それが富山に根づく何か気質のようにも感じられ、このためか、富山における文化財が散在していても、富山がまるごと文化の園という自然な感覚に包まれているかのように思う次第である。

では富山が特別かというとそうではなく、どの地域でもそれぞれの個性が基礎となって土地柄の感覚を源にした沸き上がるパワーが地域を魅力的にするものである。

6.2 地域づくり

地域づくりは大規模系街づくりとしておく。県域全体を地域として捉え、大規模な観光地を核に種々の観光地をもネットワークで結ぶ富山まるごと計画というべき構想が展

開され、そこにおいては、県域全体の成長戦略の下、立山のブランド化を始め、経済と市民生活の一体化がもくろまれているかのようにみえる。この種の問題の論議はもちろんのこと、立山や黒部峡谷などの大規模観光はここでは割愛する。

6.3 街づくり

観光には、住民や風景・伝統など多様な要素が複合している。どこでもそうだが、一つの要因だけではパワーが漲らず、集客が困難となるという。このため、観光はいくつかの要因を複合させて事に当たることになる。以下に、街づくりとして観光、伝統保全、住まい充実、等を項目ごとに主な地域をも記すことにする。

a.観光、自然や伝統を目玉に

自然鑑賞；集落と自然；五箇山、大岩、他
伝統集落；五箇山(菅沼、相倉)、八尾、砺波散居

街；井波、山町筋、金屋町、吉久、滑川、岩瀬

伝統芸能；八尾おわら、福野麦節、他

伝統祭り；新湊、魚津かんとん、他

b.保全と活用；上記の集落や街において、活用中心に活動

c.住もう環境づくり；住み続けて守る住まいと風情

文化材指定の個人宅も改修ままならずとしても

6.4 村づくり

街づくりの取り組みは数多いが、村づくりになるとめっぽう数少ない。昭和の大合併以前に村としていた地域は平地であれ中山間域であれ、村と呼ばれている。また町を村と呼んで愛着を喚起することもある(他県例、石川津幡でのコンパクトビレッジ構想はタウンなのにあえてビレッジとする)しかし、富山では合併前が村であっても村とは呼ばず、中山間域に限定した村を対象(津幡のケースは別にして)とすることにしておくと、対象の村では領域が狭く、その意味では小さな村という呼称が適切である。ただし、村においては、街づくりのような賑わいがないにしても一軒家とその周辺自然環境とのセットを小さな村とか一軒村することもありとした。

小さな村の構成を列挙する。

- ・イメージ；家が散在しかつ人もまばらの村を対象
- ・種類；生業確保・推進、環境保全、環境に親しむ
- ・主体；村民、にわか村民(訪問者の本宅と村とが繋がる)
- ・主導；村民、にわか村民(訪れた方々の総称)
- ・支援；研究室、市民(周辺市町村)、
- ・活動；農作物(米・野菜)づくり、下草刈り、
水源・用水確保、森林・植物・動物等自然鑑賞、
静寂さ体得、他

6.5 環境保全

街づくりという形態をとらなくても、街の発展の下支えとして、森、田畠、等を守るとか、安心安全の提供とかの取り組みがある。例を挙げれば；

- ・焼き芋屋さんが山を守り、平地で芋を栽培し、間伐材を燃料にして芋を焼き、焼き芋ファンを喜ばせている。
- ・自然栽培農家は山や谷を守り、安心安全な米や野菜作りに精を出し、植生や風景を守っている。なお、自然栽培派の方々は、上市、立山、氷見、南砺、等で頑張っている。
- ・山において生計を立てている方々は今でもおられるが、安い外材に押されっぱなしの県内産材では報われないと。とはいっても、頑張ってほしいものである。とにかく、林業による山の保全は、山崩れや下流域での洪水の防止には欠かせないことはいうまでもない。

6.6 街づくりにおける人間模様

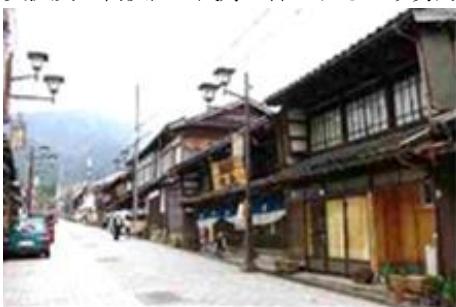
各街づくりを対象に街づくりにおける人間模様について述べる。

6.6.1 街づくり人間模様

多くの伝統的な街における特徴的な活動は、携わる人間や各人のバックグラウンドを形成する環境の産物であり、当該地の個性そのものといえる。これが我らの求める身近な小規模の社会づくりそのものなのである。ここにそれらをまとめて街づくりの英知として特徴的なものを列挙する。なお、本稿では各街づくりの詳細を記さなかつたので、初めて目にする方々には可能な限りイメージングをお願いしたい。

(1)井波(写1) ;「木彫りの街」として有名な井波の街。伝統建築と生業とが一体となった街においてその保全には、県内初となる「区域内の歴史と伝統を守り、うるおいのある美しい町とする協定」を町内毎に制定した(2005年)。以下、細目を記す。

- ・協定者は；建築物の敷地内の緑化及び既存の樹木等の維持管理に努力、協定の区域内の美化(清掃活動・花植え活動)努力、建築物の新築・増築・改築には位置・形態・色彩に配慮
- ・建築物は街並みと調和のとれたまとまりのあるデザイン、建築物の屋根には有勾配・黒や灰色の日本瓦、外壁の色彩は黒や茶系統又は白色、木製のドアや引き戸の活用、看板は木製、木彫りの表札
- ・街路灯・案内板・看板等の整備に協力、歩行者や住民の交流及び利便性が良好に保たれるよう努力



写1 井波の街並み

(2)吉久；地味な街ゆえか、日常を地味に営んでいる住民の皆さんで街を守る気風がある。街中にギャラリ付きの喫茶

店を中心にコミュニケーションに華が咲いている。最近、元大学教員がここに居住され、皆さんと挨拶を交わしている。たかが挨拶一つとしても、住民の喜びはコミュニティでは当然である。



写2 吉久の街並み

(3)八尾(写3)；もともとは生業の町、そこに土着の祭りとして八尾おわら踊りがある。伝統の舞踊を若い世代に伝えるために地域一丸となっており、通常の日常生活までコミュニティが機能している。そこにおっちゃんが八尾っ子の親父として存在。



写3 八尾、おわら踊り

(4)上市護摩堂(写4)；大岩から7km程北の中山間域には、弘法大師がこの地で神水を沸き上がらせたという伝承の地。今では食事処(八十八)として一軒のみが残っている。定住者はそこのご夫妻のみ。一軒家食事処は県内には幾つもある。



写真4 上市護摩堂の一軒屋、by 八十八HP

(5)大岩(写5)；人と自然が一体となる一軒村あり。7章
20年弱前に空き家となった当該家は、ハイキング中継場所やアニメの舞台として知られ、全国各地から多くの方が静寂差を求めて来訪。



写5 大岩の一軒村

(6)滑川(写6)；街の風情をつくる各種伝統建築。これらが拠点として市民の拠り所となり、伝統美のオーラーが周辺に拡散している。7章



写6 滑川宿、旧本陣

6.6.2 お祭り

富山では著名な祭りは以下のとおりである。
津沢夜高あんどん祭り、新湊曳山祭、高岡御車山祭、
越中八尾曳山祭、岩瀬曳山車祭、滑川のネブタ流し、
魚津のたてもん祭り

祭りは地域おこしや街づくりの大事な歴史的文化であり、地域の結束や世代間交流により、伝統を守る取り組みが続いている。本稿では街づくりのうち、居住を中心と論じているので、祭りは割愛とする。

7. 実際の取り組み事例

7.1 北陸街道滑川宿街並み

「声がこだまする往来」と題した街づくりとして北陸街道越中路の宿場町「滑川宿」において、10数年前から伝統文化の保全を目指した現代の文化オフスがつくられている。滑川宿が現滑川市の中心に位置し、「日常生活の一部ここにあり」の雰囲気がつくられている。そこには、街の伝統的お祭りや現代的なバーソもがあり、街の「古今」混在が功を奏している。

特徴的なのは、旧本陣の町家が地域の中核となり、住民の街の拠り所となっていること。何かにつけて住民はここに集まり、活動するのである。例えば、地域との関係で行事といえば、雛祭りがある。旧本陣建物において、各家庭で使われなくなつて寄贈され保管されているお雛

様を雛祭りに一堂に展示して大公開があるのである。旧本陣上屋が極めて大きいものだから、二十数組のお雛様も鎮座して生ずる存在感がオーラーとなっている。そうした取り組みは、展示方法の創意工夫もさることながら住民の拠り所の賜物として成立している。

この街の担い手は地域の街衆各位であり、学術には地元の研究者も加わり、運動が続いている。特別に行政や企業からの支援を受けていないこともある。市民のための街づくりが貫かれていて、滑川宿は滑川のバッケージ形成に大いに貢献している。

7.2 富山中山間地域大岩の小さな村(一軒村)

富山大岩地域の古民家とその周辺域において、10数年前から特別に意識することなく、親子の居場所づくりから中山間の村づくりへと活動を広げている。これが一軒家と周辺からなる一軒村であり、その周辺にはいくつかの小規模な村がある。一軒村は村を支える長期滞在のボランティア、時折応援の周辺各位、全国各地からの一時滞在の訪問者から成っている。とりわけ、訪問者の環境へ思い入れと環境からの受けが人と自然を一体にさせ、訪問者のただそこに居るという関わり方が一軒村を賑やかにしている。また一軒村はコミュニティの原点を彷彿とさせている。一軒村の様相を記す；

- ・土地・大地・空間の居を介した複合(複相といべきか)
- ・富山どこの場も思い入れの場。訪問者の自宅にも影響及ぶ
- ・自然環境や人間環境が一体となって実感
- ・全国の訪問者と村の間には思い入れが実感として繋がる
- ・著者らが手掛けている富山の中山間での小さな村では、地域まるごとが自然との一体化に調和しており、訪問の親子を含め皆さんが自然環境・人間環境を楽しむことを可能にしている。また、こうした体験の積み重ねが親子のみならず皆さん的人間性を育んでいる様を見ることができる。
- ・生活の営みの根幹を実感(セスとそこからの精神性)；ありのままの思考と行動、自然感性の宿り、場と人の世界にて一体かつ相互に作用、人間同士や親子の織り成す場、遊びのコミュニティ、何もない森ではなく何でも見つける森(自然も)

8. おわりに

本稿の今ひとつの視点から「おわりに」を構成；市民活動においては、種々の施策には市民の声が反映されにくく、これまでのようなパブコムや説明会(時には行政主導の市民会議)では不十分さが否めないので、施策の前段階に市民側の力を発揮させるために、市民側の社会的基礎体力の醸成を不可欠と考え、この基礎体力形成に向けて論を進めるに至った。これには、コミュニケーションのコミュニティと街づくりが両輪となるとして、本稿では街づくりに着目し、

かかる目標に向けての街づくりの果たす役割を検討することにして、街づくり一般論から始まり、富山での実践をもとに街づくりを考察した次第である。

論議の結果を以下に記す。

(1) コミュニティ面からの各街づくり、主な(著者判断の)特徴；

- ・地域一体で家族的コミュニティ；八尾。おっちゃんが八尾っ子の親父
- ・中山間域でゆっくりとにわか居住；大岩山間地
- ・街の風情を街づくり協定により守る；井波、
町内会単位で協定。

そぐわなければ新築・改築の禁止

- ・市民の拠り所として風情ある建造物；滑川、
日本陣建築が風情を醸し出す。
- ・地味に町衆で守る気風。歩いて親しむ街；吉久
- ・地域全体を守る憲章制定；(県外だが)竹富島
人間環境と自然・社会環境の保全。開発禁止
- ・街の訪問時を思いおこし訪問者各自宅・周辺で配慮可；
井波
- ・訪問者と環境とが一体で思い入れが自然と磨く；
一軒村

(2) 街づくり； 住民や訪問者に対し、都会論理からの規制は何もなく、その意味では街においては都会も田舎も対等であり、自律があり、「個からの始まり」や「足元から」といった所からの社会があるといえる。これが社会的体力形成のなす場であり、街であるといえる。こうした要素が日頃の街づくりには、しっかりと組み込まれており、かくして勢いがより増していく。また、街は単独でも凛と構え、かつそうした街を大気があたかも包んでいるかのようでもある。こうして、足元の世界が積み上がって、地域やその上位のものへと繋がっていき、これまでの大規模かつ複合肥的な世界に向か、足元からのぬくもりが向上していくと考えることができる。

(3)まとめのまとめとして街づくりとは；個々からの思考・行動・感性が(生業含め)暮らしを充実させ、それこそ今はやりのコムニケーションを形成していく。こうした活力が身の回りで街をつくり、地域やその上位へと積み重ねていく。その原動力が街づくりであると考える。また、街づくりには、老若男女が基本。新しさと古さの(歴史を含め)共存・調和。そのための調和保全と調和づくりとがより大きな世界へのセス思考・行動の源、と考える。

△ 街づくり論については、既往の論理もあるが、社会的土壤づくりの観点で検討し直したものであり、より詳細な検討は今後としたい。今後はコミュニティの一層の充実化をふくめ、より具体的な議論を進める。

9. まとめ、今後に向け；

本市民感覚と社会運営論理との併存を目指して

近年、社会においては、程度の差こそあれ市民参加が謳われ、行政主導のパブコメや市民会議をはじめ産官学

民の連携が盛んとなっている。そこでは市民の声が届く(聞いてもらう)だけではなく、市民との協働・共同・連携が図られている。

しかしながら、実際には市民参加は未だ道遠く、主体者・主導者となる官・産・学と肩を並べるレベルではない。こうした状況下では、社会推進側にはそもそも市民存在が主体的に捉えられていないこともあって、社会運営の構成システムにも未だ反映できていないばかりでなく、社会の良識見識には市民側からの想いが入りにくくなっている。

では市民側からも社会運営とかかわりを持つにはどうすべきか。これには、市民対社会の枠組みにおいて、市民が社会運営側に思いを託すだけではなく今一つ踏み込み込み、社会の考えを市民側からも作り上げ、これを市民論理として社会システム運営の論理に併存させてはどうか。またこれをもって社会意識に市民感覚を反映させて、それこそ社会的基礎土壤(社会を構成する人間の思考・行動の総体)としてはどうか。

ここではそのような市民側ビジョンを提唱し、市民論理並びに社会基礎土壤のあるべき姿を概観し、そのための市民コミュニティの様相を明確にしたい。

まず足元社会に着目する。市民の基礎行為としてはセンス(感性)と親和性(コミュニケーション力)があり、これらはコミュニティにおける生活実践を通して生活環境・人間環境において作り上げられている。

センスについては、常時蓄積されるものでセンスからの思考・行動へと繋がっていき、市民流の哲学的・社会学的水準まで湧き上がっていく。

親和力については、人的関係性におけるセンスと捉えられ、身の回り・街の次元から社会へと広がっていく。その際に湧き出る力としてセンスが備わっていく。

次に、足元からの実践に着目する。足元における街づくりとコミュニケーション場づくりが市民のエネルギーを沸き上がらせ、社会にはボトムアップの流れをつくり、これが街から都市や社会へと市民の思いが通ることになる。

このように足元における生活実践を通して営みの根幹が深化し、市民感性が思考へと質的向上を促し、活力の源となる。これらが市民論理や社会的基礎土壤に繋がっていく。

本思考の効用としては、市民の生活実践が社会的基礎土壤づくりで結実し、市民の誇りへつながり、社会諸問題はもちろん不条理問題に対しも、併存する市民論理や社会的基礎土壤からの沸き上がる力に期待が持てると考える。

以上をもって、市民感性からの社会づくり構想の試案とする。なお、本稿討論の関係各位に謝意を表する。